

中国の大学における日本語教育事情及び陳述副詞の指導方法	
王 冲	国際日本学専攻
期間	2006年9月11日～2006年9月22日
場所	中華人民共和国
施設	華東師範大学、北京外国語大学、天津外国語学院、大連外国語学院

内容報告

1. 海外調査研究の必要性

1.1 中国の大学の日本語教育における陳述副詞の指導状況（調査1）

中国語を母語とする日本語学習者にとって日本語の陳述副詞の習得が難しいという理由は陳述副詞自体の複雑さ、類義表現自体の難しさ、および母語である中国語の影響などが考えられる。博士論文はこのような問題を意識しつつ、「きっと」「必ず」を事例として陳述副詞の習得研究のありかたを問うべく、これらの陳述副詞の意味用法の詳細な分析と検討によって陳述副詞習得研究の方法論を検証し、その方法論に基づく陳述副詞習得研究の事例を示そうとするものであり、それを踏まえて陳述副詞の有効な指導法を探ることを目的としている。今までに、「きっと」「必ず」の意味構造、習得状況については、明らかにされ、論文としてまとめられて学会誌で公開されている。博士論文の構成の不可欠の部分として、中国の大学の日本語教育の実情、及びこれらの陳述副詞の指導状況をさらに明らかにする必要がある。中国語を母語とする日本語学習者の習得に与えている要因には、教科書、辞典、教師の指導があると考えられる。そのため、現地に行って、これらを調査する必要があると思われる。その結果を踏まえることで初めて日本語教育における陳述副詞の指導に提言できるようになる。

1.2 中国の大学における日本語教育事情（調査2）

近年、グローバル化時代における日本語教育についてよく議論されている。その際、日本の本土だけではなく、海外での日本語教育実情はもちろん把握しなければならない。中国は長い歴史があり、過去には日本との間には特殊な歴史があるため、中国には中国なりの日本語教育事情があると言える。また、人口が多い中国では、これから日本語教育をさらに展開しようと思う場合、どうすればいいかを考える必要もある。

2. 海外調査概要

2.1 調査1の調査概要

この調査では、中国の大学の日本語教育における陳述副詞の指導状況、学習者が使用している辞典、教科書における陳述副詞の記述などを調査したい。そこから、今までの学習者の習得状況の結果を結びつけ、さらに学習者の陳述副詞の習得に与えている要因を分析し、有効な陳述副詞指導法を提言したい。

したがって、以下の項目について各大学の2名の日本語教師（計8名）にインタビュー調査を行った。

- ①類義語、多義語の説明が難しいですか。
- ②陳述副詞を教えるとき、困ったことがありますか。
ある場合、どんなことですか。
- ③深く考えずに、「必ず」と「きっと」の例文それぞれ5個を教えてください。
- ④授業で「必ず」「きっと」それぞれ説明しますか。
また、「必ず」「きっと」の使い分けについて説明しますか。説明する場合、どう説明するかを具体的に教えてください。説明しない場合、その理由を教えてください。
- ⑤学習者にとって「必ず」「きっと」の習得状況はどう思いますか。判断する理由があれば、教えてください。
- ⑥「必ず」「きっと」の指導について、何か提言と期待がありますか。

さらに、学習者がよく使用している『新編日語』『大学日語』『新日漢辞典』における日本語陳述副詞「きっと」「必ず」の説明を調べた。

2.2 調査2の調査概要

調査2では、中国の大学における日本語教育事情（学習環境、カリキュラム、学習リソースなど）を明らかにする調査を行った。これらを出発点として、グローバル化時代における日本語教育に必要なものを考えた。

3. 海外調査結果

3.1 調査1の結果

3.1.1 教師へのインタビュー

教師へのインタビューでは、教師たちは類義語・多義語の指導について難しいと感じており、「きっと」「必ず」を指導する際、中国語の「一定」で説明し、共起するパタンのみを提示する場合が多いという結果がわかった。

3.1.2 教科書、辞典の調べ

教科書、辞典の調べでは、以下の結果を得た。

『新編日語』は中国語母語話者を対象にした教材であるため、説明は中国語で書かれている。一つの課が本文、会話、応用文、単語、言葉と表現、ファンクション用語や練習から成り、また言葉の表現に多くのページを費やし、コミュニケーションにも目を向けている。「きっと」「必ず」の説明は以下の通りである。

「きっと」：一定

例：元旦は大変な人出で、バスが～混むでしょう。

「必ず」：一定

例：～鉛筆で書いてください。

『大学日語』は大連外国語学院で編集された教材で、全四巻である。大連外国語学院の日本語学部で、基礎日本語の教科書としてそれぞれ大学1年生前期、後期と大学2年生前期、後期で使われている。中国語母語話者を対象にした教材であるため、説明は中国語でなされている。この教材の目的は、日本語の基本的な文法の知識を教えることと、その運用能力を養成することである。各課は会話、文型、単語表、文法、練習問題、注釈などで構成されている。「きっと」と「必ず」の説明は以下の通りである。

「きっと」：一定、必定

表示说话人的断定，决心和推量。相当于汉语的“一定”。（訳：副詞で話し手の断定、決心、推量を表す。中国語の「一定」に相当する。）

例：国へ帰るのは一年ぶりだと言っていましたから、きっと喜んでいるでしょうね。

「必ず」：一定、必須

两者都是副词，又都可以译成汉语的“一定”，但含义有所不同。「きっと」主要表示说话人的主观推断。而「必ず」除了可以表示主观推断外，还可以表示自然规律，必然的结果。（訳：「必ず」、「きっと」はいずれも副詞で、中国語では“一定”と訳すことができる。しかし意味は多少異なる。「きっと」は主に話し手の主観的な判断を表す。「必ず」はそのほかに自然規律、必然の結果も表す。）

例：朝になれば、必ず日が昇る。

必ずインクで書いてください。

『新日漢辞典』

「きっと」：一定、必然、确实

例：彼はきっと来る。／他一定来。

きっとお元気だよ。／一定很健康。

きっと行くよ。／一定去。

きっと知らせてください。／一定要通知我。

あそこに行くときっと彼に会える。／到那一定能见到他。

「必ず」：一定、必定、必然

例：勝利は必ず人民のものである。／胜利一定是属于人民的。

われわれの目的は必ずなしとげられる。／我们的目的一定能达到。

これらの説明は必ずしも十分であるとは言えない。問題点を検討してみると以下ようになる。

①「きっと」「必ず」にはすべて「一定」という中国語訳を与えている。「きっと」「必ず」と「一定」とのずれについては無視されている。

②用例の羅列に留まっており、「きっと」「必ず」の意味理解を導くような説明のし方になっていない。

③「必ず」「きっと」の「推量」用法を中心にして取り上げており、各用法の特徴、相互の関係づけについて明確に示されていない。

3.2 調査2の結果

3.2.1 大学における日本語教育の概況

「大学入学定員の拡大政策の中で日本語学科の新設や既存学科の定員増で、学生が急増している。全体的に研究志向よりも実務志向（ビジネス、観光等）が高まっている。学生の卒論のテーマは、以前は日本語学、文学、文化がほとんどであったが、最近では経済や国際関係を選ぶものが増えており、総合大学では日本語と経済学等の2つの学位を与える動きが出てきている（国際交流基金のホームページより）」。

例えば、大連外国語学院の日本語学院では、言語文化専攻、ガイド専攻、国際貿易専攻、旅行管理専攻、科学日本語専攻、情報科学専攻などを設けている。最近、他の総合大学の経済学部、コンピューターソフトウェア学部、医学部などと連携して、「共同教育プロジェクト」（5年）を実施して、日本語と経済学等の2つの学位を与えるコースも出ている。また、「日本語専攻を卒業して日本の大学の修士課程に進学し、上記の専門を専攻する学生も少なくない。さらに、社会全体の高学歴志向により、大学院進学希望者が急増しているため、ここ数年のうちに大学院の設置が相次いでいる。修士課程で日本語専攻を開設している大学は約50に上り、博

士課程を設置するところも4カ所ある」（国際交流基金のホームページより）。

3.2.2 シラバスとカリキュラム

高等教育のシラバス（教学大綱）は、これまで、日本語専攻の基礎段階（1、2年生用）のものがあり、それに準拠した教科書がそれぞれ出版されていた。2000年に日本語専攻高学年（3、4年生用）用のシラバスが完成した。基礎段階では、上海外国語大学が作成した『新編日語』（全4冊）は広く使われている。また各大学の自主制作教材を使う場合もある（例えば、大連外国語学院、北京外国語大学）。また、高学年用シラ

バスの制定を受け、『総合日語』（北京大学出版社）などそれに準拠した主教材の制作が進められているが、自主作成教材やプリントを使う場合が多い。

1、2年生の時、基礎日本、聴解、会話、作文などの授業を中心としているが、3、4年生になると、精読、翻訳、同時通訳、日本概況（日本経済、日本歴史、日本地理、日本文化、日本政治など）などの授業も設置されている（大学によって多少違いがある）。次の表1は、今回の調査対象である某大学の1年生から4年生までの一つのクラスの一週間の授業の状況を表す。

表1 一週間の授業の状況

	月曜日				火曜日				水曜日				木曜日				金曜日				
	12	34	56	78	12	34	56	78	12	34	56	78	12	34	56	78	12	34	56	78	
1年生	日本語文法		英語精読	数学	日本語会話	基礎日本語	法律	中国文学	基礎日本語		英語聴解	健康教育	基礎日本語	体育	英語精読	日本語聴解	基礎日本語				
2年生		日本語文法	英語精読	コンピューター応用	日本概況	基礎日本語	日本語作文	日本語聴解	基礎日本語	体育	英語精読	コンピューター理論	基礎日本語	日本語会話	英語聴解	日本語読解	基礎日本語	鄧小平理論		コンピューター応用	
3年生	日本語作文	上級日本語			日本語翻訳	文法		日本語通訳			日本語読解		上級日本語	日本経済	体育			日本語視、聴解	哲学		
4年生		上級日本語		日本古典文学	日本文学閲覧	上級日本語					日本語概論		対外貿易理論				中日言語比較				

3.2.3 日本語教師

最近の傾向として、日本で修士や博士の学位を取得して帰国した教師が定着しはじめている。今後は学部卒の教師にも、修士以上の学位取得が求められ、教師の再教育が課題となっており、新採用の教師に、博士号も求められるようになってきている。実際に北京外国語大学の博士課程で在職博士として勉強している教師も少なくない。

3.2.4 図書資料

中国における日本語教育が直面している一番大きな問題はやはり図書資料の不足であると考えられる。そ

れを解決するために、北京日本学研究中心が2001年から、「中国における日本学 学習・研究情報リソースの構築」という研究プロジェクトの計画を開始した。このプロジェクトの目的は、全国の日本語図書情報のネットワークを作り、学習・研究情報リソースの共有化を図ることである。

また、大連外国語学院の図書館ではコンピューター管理のシステムになっており、どこにいても、図書館ホームページからでも検索できるようになっているが、そこに中国語を入力して、検索するしかできない。そのため、検索できない資料は放置されたままになって

いると思われる。さらに、大連外国語学院の図書館のホームページには日本語電子雑誌にもなっている。

4. 博士論文における海外調査研究の位置

博士論文は中国語を母語とする日本語学習者の陳述副詞の習得状況を明らかにし、それに与えている要因を分析した上で日本語教育への還元を目的として研究に取り組んできた。博士論文の構成は以下のようである。

まず、序章では、研究背景、目的、意義を述べる。第2章では、本研究の方法論として認知言語学アプローチを採用する理由について述べる。第3章では、国語学、及び、日本語学さらには言語学の分野において、今まで陳述副詞はどのように研究されてきたかを概観し、本研究の研究対象になる「きっと」「必ず」に関する研究の結果をまとめ、日本語教育の観点からみて残された課題を整理する。第4章では、認知言語学的観点から「きっと」と「必ず」それぞれの意味構造の分析を行ったうえで、「きっと」と「必ず」を比較する。また、第二言語習得の場合、母語の意味構造は転移しやすいと考えられる。概念変化がないと母語の意味構造の転移が起きるため、概念変化をさせなければならない。概念変化を容易に起こすためには、目標言語の語の意味構造と母語の語の意味構造の異同を明示的に学習者に提示する必要がある。したがって、第5章では、「きっと」「必ず」に相当する中国語の「一定」の意味構造を明らかにし、4章での結果を用いて、「きっと」「必ず」の意味構造と比較する。さらに、効率的な教授法に役立てようとするなら、学習者が当該項目をどのように捉えているか、その習得困難点を十分に把握しておく必要があるように思われる。その場合、理

論に基づく仮説から始まる研究だけではなく、データを基盤とする研究も不可欠となるだろう。したがって、第6章では、中国語を母語とする日本語学習者の陳述副詞「きっと」「必ず」のそれぞれの意味知識について調査し、結果を明らかにした上で、第4章と第5章の結果を用いて中国語を母語とする日本語学習者の習得に与えている要因を考察する。第7章では、調査対象である中国語を母語とする日本語学習者が使用している辞典と教科書における「きっと」「必ず」の説明と、中国人の日本語教師へのインタビューを通じて、中国の大学の日本語教育における副詞「きっと」「必ず」の指導の実態を明らかにする。そして陳述副詞の指導への提言を示唆する。最後に、終章では本研究の結果をまとめ、総合的に考察し、今後の課題を論じる。

本海外調査の結果の一部分は「第7章」で述べる予定である。また、今回の調査によって、中国の大学における日本語教育概況を把握することができ、今後これを出発点として、グローバル化時代における中国の大学の日本語教育のあり方を探りたい。

参考資料

国際交流基金ホームページ

<http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/china.html>

徐一平 (2003) 「中国における日本研究・日本語教育の現状と展望—学術・教育上のグローバルネットワークにおける機能と役割—」 第六回国際日本研究日本語教育シンポジウム基調講演 香港

彭広陸 (2003) 「中国における総合的日本語教言の現状」 『国際日本学の可能性』 第5回国際日本学シンポジウム報告書 1-13

わん ちゃん／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻
mychong1979@yahoo.co.jp

【指導教員のコメント】

博士論文では中国語を母語とする日本語学習者の陳述副詞「きっと」「必ず」の習得状況を明らかにし、それに影響を及ぼす様々な要因を分析し、その上で中国における日本語教育へ還元することをめざしている。そのため博士論文の構成上、不可欠な部分として、中国の大学の日本語教育の実情、及びこれらの陳述副詞の指導状況を明らかにする必要がある。具体的には中国語を母語とする日本語学習者の習得に影響を及ぼす要因として、教科書、辞典、教師の指導があると考えられるため、現地に行って、学習者及び教師を対象として調査を行う必要がある。本学生は現在博士論文審査中で、その第7章で今回の海外調査の結果がよく生かされている。また、今回の調査によって、中国の大学における日本語教育概況を把握することができ、今後これを出発点として、グローバル化時代における中国の大学の日本語教育のあり方を探る上でのリソースになると思われる。

(比較日本学研究センター 助教授 森山 新)